

# 「貧民養生所記録」

順天堂大学古文書研究会<sup>1)</sup>

## はじめに

小石川養生所は、享保7寅年(1722)、小石川御薬園内に開設された貧民救済の為の医療施設である。ときは、近世における三大改革の一つ享保の改革(1716-45)の最中で、八代将軍徳川吉宗の時代のことであった。

小石川養生所設立の発端は、享保6年(1721)12月麴町の町医小川笙船が「目安箱」に提出した請願書にあった。翌7年正月、幕府は笙船に「施薬院」の設立を命じ、彼の「目論見」が吟味された。このような困窮者を対象とした医療施設の先例には、天平2年(730)光明皇后が創設した「施薬院」があるが中世に衰亡していた。笙船の請願による「施薬院」は、養生所と呼ばれ幕末まで続いた。

「施薬院」の開設に到るまでの経緯は、『享保撰要類集』(享保元年(1716)より宝暦3年(1753)までの法令先例集)の中に記事がある。国立国会図書館近代デジタルコレクションの『享保撰要類集』二十八上・下二冊に養生所の部として原本が公開されている。順天堂大学山崎文庫には、表紙に「貧民養生所記録」と題する、享保7年正月21日から元文4年(1739)9月18日までの記録がある。その他、養生所の設立目論見については『東京市史稿 救済篇』第一(1921)にも掲載されている。2010年には、子孫の小川明氏による『赤ひげと小石川養生所肝煎の歴史』が刊行された。

本稿は、山崎文庫の「貧民養生所記録」を解説したものである。

なお、この「貧民養生所記録」には「施薬院」と「養生所」の二つの名称がみられる。この名称については、東京都立中央図書館特別文庫室が所蔵する「小石川養生所之圖」(図1)に付された「養生所ノ始末」(図2)に「新ニ施薬院ヲ小石川薬園ニ建記シ、假ニ名目ヲ養生所ト称スル筈ナレバ……」とあり、「施薬院」が「養生所」と呼ばれるようになっていったようである。

順天堂大学医史学研究室では、1990年より有志<sup>2)</sup>が集まって、山崎文庫の史料を読み始めた。本稿は、その解説史料の一つである。

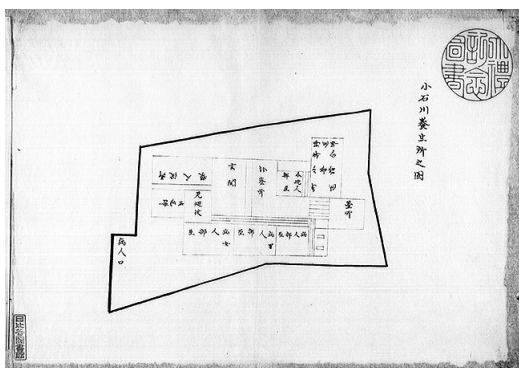


図1 小石川養生所之圖  
東京都立中央図書館特別文庫室蔵

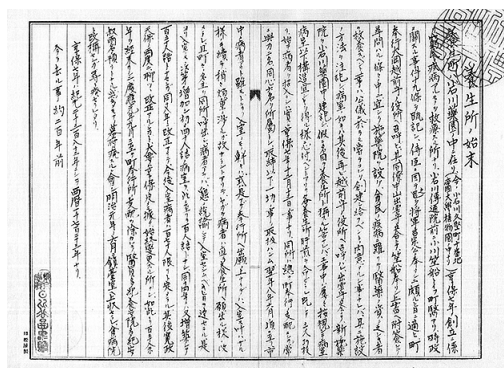


図2 養生所ノ始末  
東京都立中央図書館特別文庫室蔵

## 〈凡 例〉

- 1 原則として原文に沿うこととしたが、常用漢字として広く通用しているものは適宜常用漢字で表記した。
- 2 助詞として使用する変体仮名（者=は、江=え、而=て、与=よ・と、茂=も、尔=に）は、平仮名で表記した。
- 3 合字の「ㇿ」は、平仮名で「より」と表記した。
- 4 漢字の踊り字は「々」、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ゝ」と表記した。
- 5 誤記と判断できる字句、または疑問のある字句はそのまま表記し、脇に（ママ）、また（カ）を施した。
- 6 判読不能な字句は、□で表記した。
- 7 原本にはないが読みやすくするために適宜句読点を付した。
- 8 赤字の文字は文末に（朱字）と付した。

## 『貧民養生所記録』

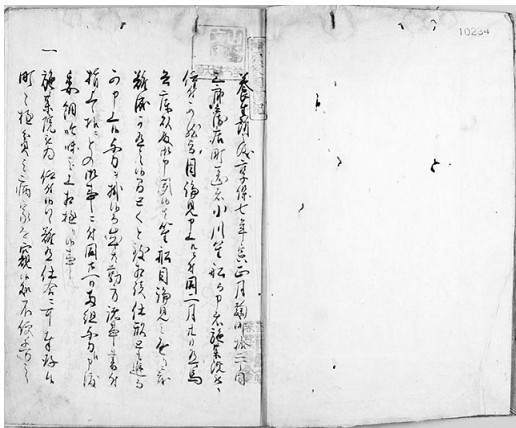


図3 『貧民養生所記録』  
順天堂大学山崎文庫蔵

## 神原家図書記 (図3)

養生所之儀、享保七年寅正月麴町拾二丁目、三郎兵衛店町医者小川笙船と申者、施薬院被仰付可然旨目論見申上ルニ付、同二月廿日有馬兵庫頭殿御申聞候は笙船目論見之通りニも難成可有之候間、とくと致相談仕形とも追て可申上候、与カヲ掛候て成共勤方諸事書付指上候様ニとの御事ニ付、同廿一日両組与力え申渡委細吟味之上相極り候事

一、施薬院被為 仰付候ハ、難有仕合ニ可奉存候、町々極貧之病家を窺候処不便千万之仕合

共ニ御座候、武家方より奉公人ヲ大病ニ付請人方え返し申候処、請人も親類ニても無御座候者共、散々ニ看病仕候無道人も多御座候、其外無縁之者或は妻子等無御座候貧人之相煩ニハ、見殺ニ仕候事も多御座候、院料之儀は御当地町々之名主御停止被為 仰付、名主料金を町々より被召上院料被為仰付候ハ、御足金少々之儀ニて相済可申歟と奉存候、左候得は施薬院御普請料斗之御物入と奉存候、此義も少々ハ御物入之足シ金愚意ニ存当り之儀御座候、名主跡役之義ハ町々家持共え廻り名主と申事ニ被為仰付候ハ、御公用弁申儀只今之通ニ相替儀御座有間敷と奉察候、町人之儀は名主料金を御公儀様え差上候得ても、其外ニ名主え々年ニ遣申金子多御座候ヲ相止申歟、徳分ニ御座候間悦可申と奉存候名主儀は御政道助ニも少ハ可罷成もの之処、当時之名主共は慾奢而已ニて御座候間、却て御政道之妨ニ罷成間事共も仕出シ申候、此儀御尋ニ候ハ、町御奉行様迄口上ニて可申上候

## 〔下ヶ札〕

此ヶ条之儀は江戸中ニ施薬院老ヶ所御建、便りなき病人入置、御扶持入医者衆之内代りニ致療治、看病人は老衰いたし便なき男女可有御座候間、其者共を施薬院え入置申候ハ、可然申候

一、名主共之儀相尋候処外ニ替儀も無御坐、支配  
 之ものえ名主料之外入目を掛候付町々之物入  
 多候由笙船申候、然共唯今急ニ名主ヲ相止候  
 事も難仕可有御坐候哉、家持共え廻り名主ニ  
 申付候儀も如何と奉存候、笙船ハとかく名主  
 相止可然旨申候

寅正月二十一日

右ハ享保七年寅正月廿一日小川笙船書上候ヶ条之  
 内抜書也

養生所諸書付之内一往相極候以後様子替り、  
 当時不用之品多有之候ニ付其分ハ〇此印付置  
 候（朱字）

一、施薬院下役拾人之儀当分諸事致シ馴候内、私  
 共組同心之内拾人下役ニ可被仰付候哉、左候  
 ハ、遠方之儀ニも御座候間、於施薬院昼夜御  
 賄被下置候様ニ仕度奉存候

一、右同心指遣置候ニ付与力共之内も兩人程昼斗  
 指遣置可然哉と奉存候、是又御賄被下置候様  
 ニ仕度奉存候、右之通被 仰付候ハ、岡田理  
 左衛門世話仕候ニも及申間敷哉ニ奉存候以上

六月 中山出雲守  
 大岡越前守

右書上享保七年寅六月廿日有馬兵庫頭殿え上ル

一、施薬院え相詰候医者衆之儀ハ小普請医者之内  
 一兩人被 仰付毎日見廻り、夜中病用之為ニ  
 ハ施薬院向寄ニ罷在候町医者扶持人医者之内  
 兼て一兩人被為 仰付置、役人方より申遣シ  
 次第施薬院え罷越病用相達候積り、且又小川  
 笙船義昼斗見廻病人介抱薬吟味等世話仕セ可  
 申候、見廻之儀ハ隔日又ハ御用有之時ハ毎日  
 も罷越、御用無之節ハ二日間ニも見廻候之様  
 可仕候

笙船見廻ハ相止俸丹治相勤候（朱字）

一、施薬院え町奉行与力兩人附置毎日老人ツ、相  
 詰、施薬院一式之差岡仕病人出入相改、惣賄  
 御入用等病人え用ひ候人參之吟味迄世話仕候  
 積り

一、町奉行同心 拾人

内

一、忒人 年寄同心  
 是ハ賄所惣元ノ諸色請払吟味役

一、八人 平同心  
 是ハ薬煎并病人見廻り役

右昼夜隔番ニ相勤候積

一、下男 八人  
 此下男御抱ニ仕賄所働門番人、其外病人看  
 病火事之節足弱之病人ニ附添罷出候様ニ仕  
 可然奉存候

一、女 三人  
 是ハ女病人看病又ハ先濯物等之為召抱可  
 申候、但当分ハ兩人抱病人數も多罷成候  
 ハ、三人ニも可仕候

上付札

食焚 当分ハ 一人  
 汁焚

野菜拵共ニ 一人

水汲 当分ハ 一人

小遣 忒人

病人扱

薬煎 当分ハ 一人

門番 一人

下男門番共都合八人

一、施薬院え参候病人町々ニ罷在候、極貧ニて薬  
 も給兼候躰之者、或ハ独身ニハ相煩看病人も  
 無之もの斗療治被仰付候積ニ御座候、但歩行  
 難成ものハ家主入用を以駕籠ニて施薬院え指  
 越候様ニ可仕候

一、病人え夏帷子老ツ冬布子老ツ、御仕着并鼻紙  
 被下、且又借夜具蒲団、蚊屋も相渡可申候

蚊屋相止紙帳ニナル（朱字）

一、病人施薬院え遣候儀、寺社方町方近在共筋々  
 え申出候ハ、致吟味候上、施薬院え指出可申  
 候

筋々え不申出直ニ養生所え願出ス（朱字）

一、病人快氣仕施薬院を罷出候砌、医者衆与力共  
 笙船立合相談之上与力共方より相届させ可  
 申候

〔下ヶ札〕

此笙船立合之儀、笙船ハ隔日又ハ二日置ニ

も不時に見廻り候儀御坐候間居合候節斗り立合吟味仕可申候

- 一、病人段々平癒仕歩行罷成候時分、養生所之内刀附候為メ他所え罷出度と申候ハ、与力共え断候上勝手次第ニ為仕、若不罷帰候共其通ニ可仕候、尤其節ハ与力共方より最初病人差越懸りえ相届させ可申候
- 一、外より通ひ候て療治請度と申もの施薬院え罷越願次第、武士方町方近在之者無差別、与力共并筥船立合吟味之上療治為仕候之様ニ可致哉、又は寺社方町方近在ハ筋々え申出次第、其懸りより与力共え断有次第療治仕セ候様可仕哉、勿論此類給物ハ持参仕候様ニ可申付候〔下ヶ札〕

此筥船立合之儀、筥船ハ隔日又ハ二日置ニも不時に見廻り候儀ニ御坐候間、居合候節斗立合吟味為仕可申候

- 一、施薬院ハ小石川御薬<sup>(ママ)</sup> 藪之内にて御普請被仰付候積り、則施薬院住居之絵図指上申候  
施薬院惣御入用積り  
病人四十人之積にて長屋相立候処段々長屋相増候(朱字)

- 一、金貳百拾兩三分銀貳貳匁余  
是ハ施薬院こけら葺にて仕候惣御普請御入用

右は町方闕所金之内を以御普請可仕候、但シ入札にて吟味仕候ハ、増減可有御座候得共、大概御金高程御入用積ニ御座候

- 一、金貳百八拾九兩銀拾貳匁壹分八厘  
病人四十人之積之処当時病人段々相増候(朱字)

是ハ施薬院御扶持方諸色賄下男并女給金其外買立候御入用

右は常俊上り屋敷地代金を以当年ハ賄可申候、来年よりは町方上り屋敷并常俊屋敷之地代を以賄可申候、則助成屋敷別紙書付指上申候

〔下ヶ札〕

此兩所之上り屋敷当分明地多御座候ニ付、

地代当分貳百六拾七兩余納り申候得共、段々借詰候ハ、四百七拾兩程納候積りニ御坐候、併病人数段々多罷成候ハ、此地代斗にてハ賄金不足可仕候間、其節御蔵より受取り候様可仕候

- 一、御扶持方ハ御蔵より請取、塩味噌薪炭等御買上ニ仕候てハ蔵物置等も無御坐候てハ難成候間、一式入札致させ町人請負ニ可申付候  
御扶持方米も御買上ヶニナル(朱字)

### 外

- 一、病人絶食杯にて食附候為医者衆致差図候ハ、外之食事も給させ可申候
- 一、施薬院にて致病死候無縁之者は回向院下屋敷え差遣可申候、此御入用病死老人ニ付錢四百文程ツ、にては相済可申候、右貳ヶ条御入用高先達てハ難積御坐候、是ハ与力共方え少々宛金子渡シ置、追て勘定仕候様ニいたし可然奉存候

右差当り候儀斗大概先相窺申候、此外洩候儀も御座候ハ、追々可申上候以上

享保七年寅七月

中山出雲守  
大岡越前守

小石川伝通院前ニ罷在候小川筥船と申者、極貧之病人之為施薬院可被仰付哉之旨、目論見書付存寄申上候ニ付、段々御吟味之上今度小石川於御薬藪病人養生所被仰付候間、町々極貧之病人薬も給兼候躰之もの或ハ独身にて看病人も無之、又ハ妻子有之候得共不残相煩養生不相成者之類、右養生所え罷越致逗留候て療治請可申候、尤療治之内ハ御扶持杯被下、其上夏冬之衣類夜具等至迄諸事不自由ニ無之様ニ被仰付候間、其身歩行候者ハ格別歩行難成病人ハ、家主或ハ親類店請人又ハ相店之者成共相頼御役所え可訴出候、吟味之上名主判鑑ヲ以四ツ前後より七ツ時迄之内養生所え直ニ可指越候、其段役人えも申付置候事

- 一、養生所え昼斗通ひ候て療治請度と存候者ハ、其所之名主え申達、名主之判鑑ヲ持、直ニ養生所え参り役人え相達療治請可申候、是又役

人え其段申付置候事、但右之類えは御扶持不被下候、養生所え参候刻限ハ是又四ツ前後より七ツ時迄之内可相越候事  
 右之通相心得町々ニて療治請度者有之候ハ、養生所え可差越候、病人之儀当分致セ話候儀六ヶ敷存、不訴出候様ニ取計指留置候段、追て相知候共名家主五人組可為越度候

右書付享保七年寅十一月十七日有馬兵庫頭殿え上ル

覚

小普請安藤主膳支配  
 本道 岡 丈庵  
 同 内藤采女支配  
 本道 浅井幸庵

右兩人申合中一日置老人ツ、昼之間御薬菌養生所え見廻り病用可相達候、町奉行所より差出置役人并小川笙船同俣丹治と申者も罷出候間、病人薬用候儀其外人参等之儀も右之者共え致相談、相勤候様ニ可被仰渡候哉

〔下ヶ札〕

林良基倅も被差加三人可被仰付候ハ、申合、毎日老人ツ、昼之内見廻候様可被仰渡候哉

一、笙船申候ハとかく養生所え毎日医者衆被見廻可然旨申候、笙船申候通昼之内ハとかく医者衆絶不申候様ニ致可然儀ニ御座候、然ハ三人ニて無之候てハ毎日之見廻成兼可申候間、三人可被 仰付候哉

一、良基倅難被指加候ハ、木下道圓養生所近所之義ニて御座候間、丈庵、幸庵、同前に被仰渡三人ニ可被仰付哉、夜中急病之節ハ伴庵、長慶兩人ニて間ニ合可申と奉存候

小普請奥津能登守支配  
 本道 木下道圓

右養生所病人夜中急病之節、附置候役人共方より申越次第、早速罷越病用相達候様ニ可被仰渡候哉

藤堂土佐守扶持人  
 本道 八尾伴庵

三宅備前守扶持人  
 本道 堀 長慶

右兩人木下道圓同前ニ病用相達候様可仕旨主人々え可被仰渡候哉、右之通奉窺候以上

十一月 中山出雲守  
 大岡越前守

右ハ享保七年寅十一月廿日有馬兵庫頭殿え中山出雲守願上ル

安藤主膳支配 岡 丈庵  
 伊丹覚左衛門支配 林 良適

今度小石川御薬菌ニ病氣之者養生所出来候、付て兩人申合昼之内老人ツ、隔日ニ彼地え罷越、町奉行所より指出置候役人并小川笙船同俣丹治と申者遂相談可致療治候、尤病人之様子次第見ニも相越ニハ可有之儀ニ候、夜中急病之者有之節ハ木下道圓且又藤堂佐渡守扶持人医師八尾伴庵、三宅備前守医師堀長慶、右之内も罷越薬用管ニ候

奥津能登守支配 木下道圓

今度小石川御薬菌ニ病氣之者養生所出来候ニ付て、岡丈庵、林良適、右兩人致療治管ニ候、其方儀近所之事ニ候間、夜中其外急病有之節養生所役人より申越ニて可有之候間、其節相越可致療治候、藤堂佐渡守扶持人医師八尾伴庵、三宅備前守扶持人医師堀長慶も養生所近所ニも候間、指図次第右之内も相越管ニ候、此段心得として申聞候右之医師共今晚長門守宅え呼寄書付渡之

藤堂佐渡守扶持人医師 八尾伴庵

今度小石川御薬菌ニ病氣之者養生所出来候、付て岡丈庵、林良適右兩人致療治管ニ候、伴庵儀近所之事ニ候間夜中其外急病有之節、養生所役人より申越ニて可有之候間、其節相越療治致候様に可被申渡候、木下道圓且又三宅備前守扶持人医師堀長慶も養生所近所ニも候間、是又急病之節ハ附置候役人共より差図次第、右之内も相越管ニ候間可被得其意候

三宅備前守扶持人医師 堀 長慶

同文言 伴庵有之所々  
 長庵と調之

右ハ佐渡守備前守家来老人ツ、和泉守宅え呼よせ書付渡之

享保七年寅十二月四日

右御書付寅十二月五日大久保長門守殿大岡越前守へ御見セ被成候、翌六日中山出雲守えも写遣ス

- 一、御薬蘭養生所え参候病人之儀何も下々之儀ニ候得共、危キ療治無之随分入御念御療治候様ニ可被成候事
- 一、病氣之様子ニハ寄可申候得共、人参多御用無之候様ニ可被成候、万一多遣ひ不申候て難成病症ニ候は、養生所役人小川笙船等御相談之上御用候様ニ可被成候事
- 一、長病人或ハ穢敷病症ニ御退屈無之、他人え療治御渡無之積リニ可被成候、然共危キ病人ニ相極候は無御油断、役人小川笙船御相談之上他之療治ニ御替候様ニ可被成候事
- 一、病症ニ寄小川笙船等薬方之儀相尋候ハ、書付御渡候様ニ、其外病人え用候薬も御念ニ候間、前廉ニ書付笙船え御渡被置候事ハ御勝手次第之事

右書付享保七年寅十二月朔日有馬兵庫頭殿へ上ル

## 定

### 養生所定書

- 一、養生所え毎日与力老人宛隔番ニ相詰、年寄同心老人、平同心四人ツ、隔番ニ可相勤候、此外小川笙船ハ見廻り、同丹治義ハ養生所え引越罷在、昼夜立合可相勤事  
附作左衛門、十郎兵衛ハ毎日七ツ時限致帰宅候、尤差懸り候御用有之候ハ、夜分迄も罷在相仕廻候て可致帰宅候事
- 一、病人ニ薬給させ候義ハ林良適、岡丈庵隔番ニ毎日見廻り之筈ニ候、夜中其外急病之節ハ木下道圓并藤堂佐渡守扶持人八尾伴庵、三宅備前守扶持人堀長慶、此三人役人より申越次第に参り病用相達候筈ニ候事
- 一、病人儀ハ支配々より断有之、名主判鑑差添病人来候ハ、作左衛門、十郎兵衛兩人之内并

丹治等立合判鑑引合一通り承届長屋え入可申事

- 一、病人ニ薬用候儀取違不申候様ニ役人度々見廻り念ヲ入可申付候、勿論看病人之中間下女病人不沙汰ニ不致候様ニ可申付事
- 一、人参用ひ候病人有之候ハ、医者衆作左衛門、十郎兵衛兩人之内并笙船、丹治遂相談給させ可申候、尤何病人誰ニ何月何日より何文目人参入薬用候儀、年寄同心方ニ書留置可致勘定事
- 一、病人儀刀附キ候為メ外え出歩行致度旨申者有之候ハ、作左衛門、十郎兵衛兩人之内并笙船、丹治相談勝手次第出シ可申候、縦不罷帰とも其分之事ニ候、然ル時は右病人差越候懸りえ其段可相届置事  
附り病人致快気宿え罷帰と申者有之候節も右同断
- 一、右病人出入之儀委細致書留置一ヶ月切ニ翌月朔日月番え書付認可指出候事
- 一、病人之宿より若病人方え給物送候ハ、改所ニ詰居候同心早速作左衛門、十郎兵衛兩人之内え申達可受指図候、其外金銀衣類鼻紙等ニても、病人之宿より送り候品少々之儀ニても作左衛門、十郎兵衛え可申達候、兩人之内不罷在時ハ年寄同心え申聞丹治遂相談給物之分ハ病人え給させ可申候、其外之品ハ翌日兩人之内え申達可指図候、同心一分之心得にて曾て病人え相渡申間敷事
- 一、年寄同心御賄方諸入用之諸払随分入念請負之町人方致吟味、諸事僂末ニ無之様ニ可致候、若不埒之致形請負之者ニ有之候ハ、作左衛門、十郎兵衛兩人之内え申達可致吟味事
- 一、朝夕賄入用品々出シ入之時々ニ年寄同心え相届出し入可致事
- 一、朝夕病人食事いたし候節も役人見廻甲乙無之様ニ、看病人之中間下女ニ可申付事
- 一、通ひ候て致養生候病人宿より弁当持参申族は勝手次第ニ可為致、勿論給湯ハ可遣事  
附り是又名主判鑑可致持参候間、改様前条之通可致事
- 一、門出入之儀ハ暮六ツ時を限り可申候、暮六ツ

打候ハ、同心老人立合錠卸させ、当番之年寄同心方え鑑可相渡候、夜中用事有之節八年寄せ申談鑑受取、是亦同心立合錠明おろし可致事

町田三太夫  
大久保淡路守組  
篠原小八郎  
松村理右衛門

一、女病人長屋は暮六ツ前より錠口に鑑卸、夜中男一切出入申間敷候、看病人之下女をも内に差置、薬湯水用事之節は錠を明ス用事達シ候、小キ口より相達可申候、戸明候へて不叶節八年寄せ申達同心附居明させ、用事済候ハ、早速錠下シ可申事

右九人小石川御薬菌病気養生所え町奉行同心ニ相交り、諸事町奉行得差図可相勤旨申渡候間、被得其意御留守居可被談候

一、所々口々之鑑年寄同心預り置、夜中入用之節ハ其<sup>(ママ)</sup>候承届明させ、用事仕廻候ハ、同心立合錠卸させ可申事

右御書付享保八年卯三月廿八日水野和泉守殿御渡被成候

一、病人入湯一ヶ月ニ三度ニ可限、尤男病人入仕廻候已後女病人入可申事

先達て相触候小石川於養生所、極貧之病人御扶持等被下并通ひ病人共ニ養生被仰付候ニ付、逗留之病人は支配所え訴出名主方ニて致吟味、病人差遣候処ニ心得違之義も有之哉、又ハ支配所え訴出候事を大切ニ存候歟、彼是致世話候義を六ヶ敷存願人有之候ても、家主名主迄其分ニ打捨置候様ニ風聞有之候、依之向後支配所え相願候儀無用に可致候、家主ニても相店之者請人成共老人病人ニ差添、名主又ハ名主無之町八月行事判鑑を養生所え直ニ持参可致候、役人吟味之上長屋え入置養生可申付候間、一町切ニ名主家主致吟味病人共養生所え可指出候、本道外科眼病之御医者衆迄被仰付、毎日相詰候て療治有之間、地かり店借之者迄えも念を入れ可申候以上

一、病死之者有之ハ最初病人指越候番所え申越、宿家主等呼寄死骸可相渡候、無縁之者病死之節ハ非人ニ申付、回向院下屋敷え可差越事

附り支配違之者致病死候節は月番之番所え可申越候、宿家主等養生所え参死骸受取候様ニ可申付事

一、火之用心昼夜随分入念少も不沙汰ニ無之様ニ可附心候、朝夕食事以後又ハ風烈之節は猶以度々役人見廻り可申事

一、若近所出火之節ハ早東病人とも怪我無之様ニいたし立退させ可申事

附り腰立不申病人ハ兼て近所之非人小屋え申付置、人足呼寄もつこうニて退ヶ可申事以上

享保七年寅十二月 中山出雲守  
大岡越前守

於養生所名主共え可申渡旨品々

一、御薬菌之和薬を御遣ひ薬効を御覧可被遊ために、養生所を御建被遊候様ニ存違之事

一、和人参を御遣ひ被成候様ニ風聞之事

一、薬を薬屋くわんなとにて大勢のを一ツにせんし用申様ニ存候事

一、看病人杯ニ非人を致候様ニ申なし候事

一、養生所え罷出度と申病人候ハ、名主方ニて強く吟味不致、先養生所え可指出候事、此訳ハ不埒之名主共不僉之儀いたし候歟、又ハ六ヶ敷存捨置可申と存候間、養生所ニてしか吟味可致ための事

折上 町奉行え

松前伊豆守組  
青木弥二右衛門  
高橋五右衛門  
田村武左衛門  
大嶋肥前守組

別所儀太夫  
野嶋太兵衛  
櫻井新八郎

右前書之触書案ニ別紙相添享保八年卯七月三日有馬兵庫頭殿え上ル

養生所え通ひ病人之事

- 一、相煩候得共極貧ニて薬給兼候者之類
- 一、子供大勢有之相煩候へ共薬給させ候儀成兼候者之類
- 一、癩病之外難病ニて年久敷相煩候者之類、右之方養生所え通ひ療治請度と願出候ハ、薬遣候様ニ可仕候、然共人数之御定無御座候てハ是も夥敷可有御座候間三百人を限り薬遣候様相窺可然奉存候
- 一、右之通通ひ病人之品相極置、上下共ニ奉公人ハ勿論身を持候躰之もの養生所え参り候共吟味仕、向後ハ薬遣不申候様ニ可仕候

享保八年卯八月 大岡越前守  
 諏訪美濃守

右ハ卯八月十六日有馬兵庫頭殿え上ル

覚

八月十八日養生所

- 一、逗留病人 五拾七人
- 一、通ひ病人 三百拾四人

右之通病人数大勢ニ罷成、医者衆手廻成兼申候間、今日より通ひ病人参候共薬不差出候様ニ申付候

- 一、通ひ病人之内養生所長屋出来候ハ、逗留致、療治請申度旨相願候者九拾八人御座候以上
- 享保八年卯八月十九日 大岡越前守  
 諏訪美濃守

右ハ卯八月十九日有馬兵庫頭殿へ上ル

町奉行え

医師 曾谷長順  
 医師 能谷玄与

有馬内膳支配 大膳亮好庵

右小石川御薬菌養生所病人之儀願之通可致療治候、岡丈庵、林良適承合可相勤候、但丈庵、良適申談一日ニ老人ツ、相詰候様ニ可致候、尤病人之様子次第繁々にも相越候て可有之候、右之通申渡候間可被得其意候

右御書付享保八年卯十月十日石川近江守殿御渡被成候

覚

辰二月七日御下知済御付札

伺之通可被申付候

小川笹船  
 赤坂一木町  
 新肴場拝借  
 上ヶ屋舗

- 一、貳百九拾七坪余  
 表京間拾五間四尺、裏行同拾九間余  
 此代金百兩

右之町屋敷旧冬笹船え被下置候処、右屋敷ハ伊賀之者知行所ニて笹船致拝領候得共、地主兩人ニ相成其上屋敷之内寺も有之、墓所ニも地面引ケ有之、住居難仕旨笹船申候間迎も被下置候儀ニ御座候間、左之屋敷と御引替被下置候様ニ仕度奉存候  
 [下ヶ札]

此屋敷明キ地御座候ニ付当分ハ一ヶ年所替高金五兩貳分程、地面不残借シ詰候得は一ヶ年地代所替高金拾兩壹分余、地面不残建詰候て借シ候得は一ヶ年ニ店貸シ所替高金貳拾九兩余

- 一、百貳拾四坪八合余  
 下谷長者町  
 濱立院  
 上ヶ屋敷之内  
 表田舎間七間、裏行同北拾七間四尺、南拾八間五尺

△○此所下ヶ札

此代金百拾九兩程

右は此度赤坂一木町御引替被下候積、右之通奉伺候以上

享保九年辰正月 大岡越前守  
 諏訪美濃守

△○下ヶ札

此屋敷明キ地御座候ニ付当分ハ一ヶ年ニ所替高金六兩貳分程、地面不残借シ詰候得は一ヶ年ニ地代所替高金拾五兩程、地面不残建詰候て借シ候得は一ヶ年ニ店賃所替高金貳拾五兩程



右書付辰正月晦日戸田山城守殿え上ル、右伺之通相濟候ニ付同月一日屋敷筈船え相渡候事

覚

養生所病人ニ用候人参之儀一ヶ月ニ大概拾三兩程ツ、入申候、尤右之高より減候月も御坐候、右人参之儀唯今迄私共判鑑ニて人参座より取寄申候得共、拾兩余ツ、入申候節ハ指支申候、依之養生所分人参一ヶ月ニ五兩ツ、別段ニ請取申度と、其余分ハ私共判鑑ニて請取可申候間、右五兩ツ、毎月相渡候様宗對馬守方え被仰渡被下候様ニ仕度奉存候以上

享保九年辰五月 大岡越前守 諏訪美濃守

右ハ辰五月三日戸田山城守殿え上ル、御列座ニて水野和泉守殿御請取折返し

宗對馬守家来え相渡候書付写

小石川病人養生所入用ニ付て、毎月人参五兩ツ、町奉行判鑑ニて相渡候様ニ人参座え断可申遣候

右ハ享保九年辰五月八日水野和泉守殿、諏訪美濃守へ御渡し被成候由ニて即日美濃守より来ル

小石川養生所え被附置候医師并役人之覚

池田修理支配

居宅雉子町借地 本道 岡 丈庵 伊丹覚左衛門支配

居宅神田橋御用屋敷 本道 林 良適

右兩人寅十二月廿四日被 仰付

外ニ

松野八郎兵衛支配

居宅養生所近所坂下 木下道圓

藤堂佐渡守扶持人 八尾伴庵

三宅備前守扶持人 堀 長慶

是ハ備前守扶持放候由養生所え終ニ不參候

右三人急病之為メ被 仰付置候

酒井隠岐守支配

居宅神田橋外 外科 村山元格

仙石丹波守支配

居宅牛込肴店觀音堂寺内借地 眼科 笠原養湖 右兩人卯六月七日被 仰付

松前伊豆守支配

居宅神田久右衛門町 外科 関本伯元

右九月十日被 仰付

曲淵下野守支配

居宅白壁町 本道 太田道寿

瀧川讚岐守支配

居宅百間長屋前通借地 本道 安部長徳院

松野八郎兵衛支配

居宅本郷貳丁目松田善右衛門組屋敷之内借地

外科 杉本元慎

酒井隠岐守支配

居宅四谷右京町借地 外科 小崎快元

右四人ハ辰十二月廿二日被 仰付

養生所役人之覚

中山出雲守組与力

寅年より卯年迄相勤ル 満田作左衛門

大岡越前守組与力

寅年より辰年迄三ヶ年相勤ル 吉田十郎兵衛

中山出雲守組年寄同心

吉田伊左衛門

大岡越前守組年寄同心

笹岡善左衛門

同組若キ同心

佐々木藤十郎

伊左衛門代り 神田孫右衛門

善左衛門代り 布施甚左衛門

藤十郎代り 後藤村右衛門

一、右作左衛門、十郎兵衛最初寅二月廿一日養生所御用向申渡諸事相勤、養生所詰役をも申渡寅年より辰年迄相勤、作左衛門儀ハ病氣ニ付相願卯三月諸役差免

一、御褒美之儀初年ハ銀五枚翌年より銀十枚ツ、被下之候事

一、小普請より被仰付候拾貳人之者共御褒美之義も金三兩ツ、

諏訪美濃守組与力

高橋吉太夫

大岡越前守組与力  
 安藤源助  
 諏訪美濃守組年寄同心  
 服部嘉太夫  
 大岡越前守組年寄同心  
 原田辰右衛門  
 同組若同心

寺沢元右衛門  
 伝通院門前町ニ罷在候  
 寅十二月より養生所え引越罷在候 小川笙船  
 右同断 小川丹治

養生所下役

大久保下野守組  
 別所儀太夫  
 野嶋太兵衛  
 桜井新八郎  
 町田三太夫  
 松前伊豆守組  
 青木弥次右衛門  
 田村武左衛門  
 高橋五右衛門  
 仙石丹波守組  
 篠原小八郎  
 松村理右衛門

右九人ハ卯三月廿八日被 仰付

酒井隠岐守組

巳六月十二日

大納言様御台所御六尺被 仰付候

内海甚右衛

同組 川崎又兵衛

大久保下野守組

吉川甚内

右三人ハ卯八月廿二日被 仰付

折上 無宿非人之外養生所え遣候者之儀ニ付

申上候書付

覚

今度御目附掛り無宿非人之外病人，向後養生所え  
 差遣療治申候様ニ被 仰出候，三奉行懸りニも此  
 類御座候，是又向後無宿非人之外病人養生所え指

遣致療治候様ニ可仕候哉，奉窺候以上

十月

大岡越前守

諏訪美濃守

三奉行懸之病人も何之通可仕旨被仰渡奉畏候 以上 巳十月廿三日
-----------------------------------

右伺書巳十月廿三日水野和泉守殿え上ル，即御下  
 知済十月廿四日美濃守え写遣ス

折上ニ小石川

養生所下役之儀ニ付申上候書付

覚

小石川養生所下役

酒井隠岐守組

内海甚五右衛門

同 川崎又兵衛

伺之通可仕旨被仰渡奉畏候以上 巳九月十四日 大岡越前守 諏訪美濃守
---

即日御下知相済承書認上ル，同十八日内寄合ニて  
 安藤源助高橋吉太夫え申渡ス

大久保下野守組 町田三太夫

右養生所下役都合拾貳人先達て小普請より被 仰  
 付候内，右内海甚五右衛門義ハ当六月西丸御台所  
 陸尺被 仰付，川崎又兵衛，町田三太夫義ハ永々  
 相煩引込罷在候，依之三人之者代り之儀相残ル九  
 人之者相願申候，就夫右三人え被下置候勤金都合  
 九両を，只今相勤候残九人え被下置候ハ、自今  
 九人ニて可相勤哉之段相尋候処，何も小給之者ニ  
 候得ハ勝手ニも罷成候，三人分之勤金被下置候  
 ハ、九人ニて可相勤旨申之候，只今迄一カ年老人  
 ニ付勤金三両ツ、被下候，右三人之勤金九両を九  
 人え相渡候得ハ老人四両に罷成候，右之通弥九人  
 ニて相勤候様可仕候，依之三人之者代り之義ハ不  
 申上候以上

巳九月

大岡越前守

諏訪美濃守

右伺書已九月十四日水野和泉守殿え上ル

窺

一、三御奉行所より行倒病人養生所え被指遣候儀、寺社方御勘定方ハ役人之判鑑先達て養生所え取置、行倒者参候節右判鑑相添其所之町人百姓召連罷越次第、判鑑引合請取之長屋え入候様可仕候哉

伺之通ニ致へく候、寺社奉行衆御勘定奉行衆えも可被達候

一、両御番所より差遣候儀も御番所ニ有之候押切判之判鑑養生所え扣置、町人召連参候節右判鑑差添参次第引合長屋え入候様ニ可仕哉

伺之通押切判ヲ遣引合差置可申候

一、右病人養生不相叶病死仕候節ハ回向院え差遣候様ニ可仕候哉

引取人有之者ハ宿え相渡可申候、引取人無之者ハ伺之通回向院え可差遣候

一、行倒病人参候ハ、只今迄之通翌朝差上候書付え書加、御月番え計御届可申上候哉

伺之通可致候

一、行倒病人御賄一式逗留病人と別ケ候て御勘定上ケ可申候哉

伺之通可致候

右之通奉伺候

十一月

高橋吉太夫  
安藤源助

右書付ヲ以兩人伺ニ付、已十一月十八日此方御内寄合之節附紙之通下知書いたし渡ス、寺社奉行衆御勘定奉行衆えも左之通書付遣ス

覚

無宿非人之外行倒病人之儀、自今小石川養生所え被差遣候ニ付、各様御判鑑を以引合病人為請取可申候間、先達て御判鑑一枚可被指遣候以上

十一月

右書付已十一月十九日寺社奉行衆御勘奉行衆一枚ツ、於 御城遣し候

覚

唯今迄小石川養生所病人療治之上難治之者は、宿え差返シ、左も無之者は全快迄養生所え差置療治為致、全快仕候上宿え差返シ申候処、右之通ニてハ年久敷病人多養生所ニ罷在候て際限無御座候間、自今左之通相極申度候

一、難治之病人式拾ヶ月を限り病躰同篇ニ候ハ、宿え差返し可申候

一、式拾ヶ月之内段々快方ニ罷成候者ハ、式拾ヶ月過候共養生所え差置為致療治、とくと全快之上指返シ可申候

一、右式拾ヶ月過候て返し候病人又は追て同病ニて願来候共、難治之段申渡療治致させ申間敷候

右之通医師衆申談向後書面之通可仕候哉奉伺候以上 二月

書面之通相極可申候被 仰渡奉畏候以上  
午 三月五日

大岡越前守  
諏訪美濃守

右午二月廿八日左近將監殿え上ル、是ハ美濃守方にて認上ル

右病人二十ヶ月差置候儀成年より十二ヶ月限りニ罷成其伺書末ニ有之 (朱字)

養生所増病人之儀申上候書付

覚

小石川養生所病人唯今迄百人宛之御定に入置申候、其内ニ段々町々より病人之儀、養生所え願来

帳面ニ附置申候、右百人之内快気次第宿え歸シ候得は、其跡え願込候病人帳面名々順にて段々呼寄ニ為致療治候、夫ニ付申込置候病人不絶五拾人内外宛御坐候、右願来候日より六七十日目にて漸養生所え入申候間、重キ病人等ハ其内相果候者も御座候、依之迎も之儀ニ此上病人四拾人相増、平生百四拾人宛療治被 仰付候得は、常ニ申込候病人向後拾人斗宛ニ相成、夫を順々入置申候故此已後ハ相待候共、五七日之内ニは養生所ニ呼入候様ニ罷成、下々病人重々之御救可被成候、小川丹治儀も右之通被仰付候様仕度旨申之候、則諸御入用吟味仕候処大概左之通御座候

病人四拾人看病之中間三人老ヶ年分諸色御入用

金貳百拾五兩貳分銀五匁四分余  
 賄所并菓煎所道具  
 新規相調候小買物

金六兩ト錢七百四拾六文  
 病人長屋建具并賄所勝手  
 住居引直し候御入用

入札落直段

金五拾七兩三分

三口合金貳百七拾九兩貳分余 △下ヶ札

右之通ニ御座候、則四拾人分御入用積帳面貳冊并長屋建足仕候様老冊絵図一枚指上申候、増病人之儀何卒被仰付候様仕度奉存候、依之奉伺候以上

七月

病人之儀拾人増向後都合百五十人申付其外伺之通可申付旨奉畏候、五十人増候諸入用積書ハ追て可差上候以上

西 七月廿四日 大岡越前守  
 諏訪美濃守

大岡越前守  
 諏訪美濃守

右書付西七月十九日松平左近将監殿え上ル、承書左近将監殿御好之通認同廿六日ニ上ル、右書上写承書共ニ写西七月廿七日美濃守へ遣ス

○下ヶ札

唯今迄病人百人ツ、にて老ヶ年諸色御入用

金五百七拾四兩余、此度四拾人分書面之通差加老ヶ年分都合七百九拾兩程

△下ヶ札

伺之通被仰付候ハ、養生所附御金を以て申付候

小石川養生所増病人御入用積申上候書付  
 覚

小石川養生所病人五拾人相増、向後百五拾人ニ相極可申旨先日被 仰付候節、右五拾人増候入用積、追て書付上可申旨被仰渡候ニ付則諸入用左之通ニ御座候

病人五拾人看病之中間四人老ヶ年分諸色御入用金貳百六拾九兩三分銀六匁壹分三厘  
 賄所并菓煎所諸道具新規ニ相調候小買物金六兩三分錢九拾文

病人長屋建足并賄所勝手住居引直し候御入用入札落直段金五拾七兩三分

〔下ヶ札〕

只今迄病人百人ツ、にて老ヶ年諸色御入用金五百七拾四兩余、此度五十人分書面之通入用指加老ヶ年分都合金八百四拾三兩三分

〔下ヶ札〕

此長屋ハ先達て之積之通にて広ヶも不仕五拾人差置候積ニ御座候

三口合、金三百三拾四兩老歩余、但此御入用養生所付御金を以可申付候

右之通ニ御座候、則御入用積帳面貳冊并先日御返シ被成長屋建足<sup>(~々)</sup>シ住文帳一冊、絵図一枚指上申候以上 七月

書面之通相極可申候旨被仰渡奉畏候以上

西七月廿九日 大岡越前守  
 諏訪美濃守

大岡越前守  
 諏訪美濃守

右書付西七月廿九日松平左近将監殿え上、但先日御返被成候注文帳老冊、絵図老枚、今度御入用積帳面共ニ老袋ニ入上ル

袋之上承付 帳面、絵図之通相極可申旨被仰  
付奉畏候以上  
酉七月廿九日 兩名

奉存候、依之奉伺候以上  
戌十二月

養生所難治病人之儀ニ付申上候書付

覚

養生所病人難治之者は貳拾ヶ月を限り病躰同篇ニ候ハ、宿え相返可申旨去ル午二月伺之上其通ニ仕見申候処、病人之内十ヶ月程も指置候得は大概善悪相知申候、難治と相見え候病人ハ二十ヶ月差置候ニ不及、向後十二ヶ月を限り宿え相返候て可然奉存候、養生所付医者も右之通申候、尤段々快方ニ罷成候ハ、十二ヶ月過候共養生所ニ差置、とくと全快之上相返シ可申候、近キ頃病人願込大勢ニ罷成候間、順ニ入替申度候ニ付旁右之段奉窺候

二月 伺之通向後可相極旨被仰渡奉畏候  
戌二月廿六日 大岡越前守 諏訪美濃守

右書付戌二月廿四日松平左近将監殿え上ル

小川丹治養生所病人療治之儀申上候書付

覚

小石川養生所相勤候 小川丹治  
右丹治養生所え来候瘡毒病人之内療治仕見申度之旨、当正月申聞候ニ付、試ニ療治為仕見申候処、致全快候者多御坐候間、打続療治為仕候処左之通御坐候

当正月より当十二月迄

瘡毒病人

内

- 全快仕罷歸候者 貳拾二人 療治仕候
- 難治ニて罷歸候者 壹人
- 願ニて罷歸候者 壹人
- 病死 貳人
- 同篇ニ付て御医者え渡候者 四人
- 唯今療治仕候者 壹人
- 合(ママ)貳拾六人

右之通ニて全快仕候者多御坐候間、薬種料下ヶ札之通被下置候様ニ仕度奉存候、来年も療治為仕度

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候  
戌十二月廿三日

大岡越前守  
諏訪美濃守

右書付戌十二月十六日松平伊豆守殿え上ル、美濃守より写(マ)

〔下ヶ札〕○

薬種代 金七兩 小川丹治

覚

小石川養生所只今迄本道三人ニて相勤申候、近年小川丹治も相加り療治仕候ニ付、向後本道貳人ニ被仰付差支之儀御座有間敷候、三人之内曲直瀬寿徳院、藤本道泉兩人ニ被仰付、松浦昌順ハ御免被成可然奉存候

一、外科只今迄四人ニて相勤候得共、小崎快元、坂本養元貳人被仰付、杉本元慎、佐藤慶角兩人ハ御免被成可然奉存候

一、右養生所相勤候医師并小川丹治え毎年伺之上薬種料被下候ニ付、闕所過料金之内を以相渡候、去年金三百七拾六兩被下候、然処ニ闕所過料金共ニ唯今透と無御座候間、当暮可相渡金子無御坐候、依之存寄之趣左ニ申上候

一、本道只今迄壹ヶ年ニ薬種料老人ニ金五拾兩宛被下候、療治致方吟味いたし候処、只今ニては五拾兩之薬種は入不申候、大概三拾五兩程有之候得は相濟申候間、向後薬種代相止御役料米、本道老人え百俵ツ、被下可然奉存候

一、外科只今迄壹ヶ年ニ薬種料、金貳拾兩ツ、被下候、是は膏薬遣ひ方多ク入申候、平生之病人と違古疾病人多御坐候ニ付、膏薬多入其上入湯薬も遣シ候ニ付、薬種料不足に相見え申候間、壹人ニ金貳拾五兩程之積ニて、御役料六拾俵ツ、被下可然奉存候

一、目医師老人ニて相勤候、目薬之儀は別て高直成薬種ニて、其上眼病人も余程有之候、只今迄金貳拾兩ツ、被下候得共、不足ニ相見え申

候間、外科同前ニお役料米六拾俵被下可然奉  
存候

一、小川丹治儀薬種料一貼式分ツ、之積を以去々  
亥年、金六拾四兩、去子年七拾六兩被下候、  
今年唯今迄の様子致吟味候処、右之積にては  
当暮凡百兩余ニも可罷成候、丹治義は親笹船  
老ヶ年ニ金拾貳兩納り候町屋敷被下候、尤丹  
治えは每暮銀子貳拾枚宛被下置候、乍然無  
縁(ママ)之者ニ御坐候間本道より薬種料少々相増、  
金五拾兩程公役金之内を以被下可然奉存候、  
右之通奉伺候以上

九月

別紙絵図奉入御覧候以上

九月

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候

丑九月廿六日

絵図面之通可申付旨被仰渡奉畏候

丑九月廿六日

大岡越前守  
稲生下野守

右書付絵図差添享保十八年丑九月廿四日松平左近  
将監殿え稲生下野守より差上ル

書面之儀伺之通被仰渡奉畏候

丑九月十六日

大岡越前守  
稲生下野守

覚

橘隆庵門弟丹治事  
小川隆好

丑三拾五歳

書面之通可仕由被仰渡奉畏候

丑九月十六日

杉岡佐渡守  
細田丹波守

右相願候者、数年医業ニ志罷在候処、近年養生所  
病人療治をも被 仰付難有仕合奉存候、弥末々医  
業相募り候様ニ仕度奉存候ニ付、此度惣髮ニ罷  
成、名を隆好と相改メ申度旨相願申候、右之通相  
願候ニ付橘隆庵えも承申候処、丹治義医業(ママ)情 出  
シ申候、此度隆庵より名を遣シ候由ニ御座候、願  
之通可被仰付哉、奉伺候以上

十月

右書付享保十八年(ママ)巳九月三日松平左近将監殿え  
下野守より指上候

覚

一、小石川養生所附町屋敷地代、老ヶ年ニ凡金七  
百兩余程相納候、右御入用金、去子年は八百  
兩余ニて御座候、依之御入用金年々不足仕候  
間、上り町屋敷養生所え附候得共、少々宛之  
儀ニて御座候、依之筋違橋外空地之所、養生  
所附町屋敷ニ被 仰付借シ付次第地代金も余  
程上り可申候、併急ニハ借付ヶ相調申間敷  
候、然ル処右之内三分一程町年寄樽屋藤左衛  
門買請地ニ相願候ハ、地代金四百兩差出  
候、然共一度ニ指出候儀ハ難成候間老ヶ年ニ  
四拾兩宛、当丑年より拾年賦ニ上納仕度之旨  
相願候、尤此分ハ拾ヶ年過候得ハ地代ハ出不  
申候得共、当年より四拾兩ツ、相納り候外ハ  
借付次第納り、当分より之御用ニも難立候  
間、右之分ハ藤左衛門買請地ニ被仰付、何も  
塗屋瓦葺町屋ニ可被仰付候哉、奉伺候、依之

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候

丑十月十八日

大岡越前守  
稲生下野守

右書付享保十八年丑十月八日酒井讚岐守殿え上ル

覚

養生所御医師  
本道 曲直瀬寿徳院  
藤本道泉  
外科 小崎快元  
坂本養元  
眼医 伊達本覚

右前方ハ人数多三番ニ相勤候処只今ニては隔番ニ

相勤申候、就夫家来迄之支度持運無人無手廻しニ御座候間、可罷成義ニ御座候ハ、御賄被下置候様ニ仕度旨相願申候、此義只今迄は隔日ニ遠方より通ひ候義ニ御座候間、願之通於養生所ニ給物申付可然奉存候、依之奉伺候以上

十一月

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候  
丑十二月五日

大岡越前守  
稲生下野守

右書付享保十八年丑十一月廿九日松平伊豆守殿へ上ル

覚

下柳原同朋町前ニて今度吉岡因幡え相渡候、続之明キ地町屋ニ致し塗家土蔵造ニ仕養生所付ニ仕置申度候、依之別紙絵図を以奉伺候以上

寅六月

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候  
寅七月五日 大岡越前守  
稲生下野守

覚

小石川養生所病人長屋、薬調合所、役人詰所賄所共ニ惣柱根、同土台悉朽、惣家根、壁及大破并表門、裏門柱根、家根其外縁頰湯遣所塀、井戸、亀ノ甲箱、下水、惣雪隠共ニ朽損其分ニ難差置候間、惣柱根継壁繕土台新規ニ取替、家根三分一古板、三分二新板交葺替、惣塀から半分ハ古を用ひ、半分ハ新塀設置足、其外塀、したみ等所々御修復之積御入用入札申付候処左之通ニ御座候

本所石原町 小川屋伝左衛門

落札

一、金百八両三分銀拾四匁五分

米沢町 萩原屋清兵衛

右之通ニ御座候間、此度御修復仕度養生所附御金を以相払可申候、依之奉伺候、則仕様帳一冊指上申候以上

八月

大岡越前守  
稲生下野守

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候  
寅八月八日

袋之上取附同断

此帳面之通可申付旨被仰渡奉畏候  
寅八月八日

大岡越前守  
稲生下野守

右書付享保十九年寅八月八日松平伊豆守殿へ上ル

深川築出し地面願之儀ニ付申上書付

神田永井町 権兵衛  
三河町式丁目 善兵衛

右之者共願候は深川大嶋町川向御石置場を除キ海表長百拾五間程之処、別紙絵図面之通自分入用を以築立、塗家土蔵造町屋ニ仕、廻船之船頭共宿をも仕候得は、遠国より罷越候船頭共勝手ニも相成候、願之通被 仰付候ハ、海中漕通絵図面ニ有之出洲三千坪余有之候間、此出洲を相渡右邊土を以地面築立可申候、左候ハ、廻船通行も宜可有御座候、尤此度中嶋町え長拾八間之橋自分入用を以掛、新規修復共ニ永々可仕候、右為地代来ル辰年より壹ヶ年ニ金三拾兩ツ、永々上納可仕旨相願之候

右之通吟味仕候処、相障儀無御座候間、願之通申付養生所附御入用屋敷ニ仕置、可然奉存候、則別紙絵図奉入御覽候以上

寅八月

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候  
寅九月三日

大岡越前守  
稲生下野守

右絵図面相添享保十九年寅八月十九日松平伊豆守殿へ下野守より上ル

覚

霊岸橋際繩手南之方別紙絵図面之通表間口貳拾老間、裏行八間貳尺、川内埋地ニ為致御用屋敷ニ仕、塗家土蔵造町屋ニ為仕候義、九年以前午年松平伊賀守殿え相伺候候、差当り御用ニ無之事ニ候間、

先可致無用旨被 仰渡候ニ付其通ニ差置申候、只今彼辺町屋不残塗家土蔵造ニ罷成火用心ニ宜御座候、右埋地町屋ニ仕、何之相障儀無御座候間、養生所附御用屋敷仕可然奉存候、則埋地ニ仕立、年々地代上納之儀入札申付候処左之通ニ御座候

壹ヶ年仕切地代	深川富吉町家主
落札	請負人 武兵衛
金六拾壹兩壹分	通式丁目善次郎店
	証人 五兵衛

右之通年々地代金上納仕候筈ニ御座候間、埋地町屋申付、養生所附御用屋敷ニ仕度奉存候、只今迄養生所ニ振向置候所々小屋敷之儀、度々願人御座候得共、毎度養生所と申上不被下置候、当時御屋敷払底にて拜領不仕者大勢御座候間、ケ様成埋地追々見立、町屋敷ニ仕、只今迄之養生所附御用屋敷と引替、段々被下屋敷ニ仕可然奉存候、尤埋地町屋被 仰付相障儀無御座候、依之奉伺候、則絵図壹枚差上申候以上

十月

伺之通可申付由被仰渡奉畏候  
寅十月廿四日

此絵図之通埋地可申付由被仰渡奉畏候  
寅十月廿四日

大岡越前守  
稲生下野守

此書面絵図共享保十九年寅十月廿二日松平左近将監殿え上ル

覚

本銀町川通り  
佐久間町河岸通り  
南八丁堀河岸通り

右町々先年御用地ニ被 召上、其御願ニ付蔵地ハ夫々被仰付候、然此度右町々元地之者又は明キ地預り居候者共ニ住居、蔵え足シ蔵地并新規蔵地を以相願申候、吟味仕候処何も蔵之儀候得は、火除之障ニ不罷成候、願之通被仰付其外何之障も無御座候間、被 仰付候様ニ仕度奉存候、則別紙絵

図相認三枚奉入御覽候

一、右願之通被 仰付候得は、一ヶ年地代金都合式百七拾兩余ツ、毎年上納仕候、此金子之儀ハ養生所付御用ニ振向置可申候、就夫只今迄養生所付御用屋敷に仕置候所々町屋敷之内、式拾ヶ所程は被下間敷に被 仰付可然奉存候、只今迄御屋敷被下候段は被仰渡相済地面無之ニ付拜領不仕候者大勢御座候間、右式拾ヶ所分斗成共、先夫々え拜領被仰付可然奉存候、依之奉伺候以上

十二月

大岡越前守  
稲生下野守

伺之通可申付候、火除之場所ニ候間致普請候ハ、丈夫ニ可申付旨被仰渡奉畏候  
寅十二月廿二日

袋之上同断

此絵図面之通可申付候、火除之場所ニ候間致普請候ハ、丈夫可申付旨被仰渡奉畏候  
寅十二月廿二日

右書付ニ絵図三枚相添享保十九年寅十二月廿六日松平伊豆守殿へ上ル

覚

本八町堀壹丁目  
家主 伝六  
同 長十郎  
同 庄太夫  
同 利右衛門  
同 孫兵衛  
同 源兵衛  
同 権四郎  
同 市左衛門  
同 八郎兵衛

松屋町

家主 太郎兵衛  
同 五兵衛  
同 茂兵衛  
同 六之助  
同 万次郎



- 同 庄兵衛
- 同 太兵衛
- 同 甚五兵衛
- 同 作兵衛
- 同 半右衛門
- 同 八兵衛
- 同 次郎兵衛

右之者共相願候は先年兩町え御預ヶ被仰付候植溜地面有来候，十文字往來道并新道共只今迄之通差置，相残候植溜之分瓦葺土蔵町屋請負地ニ被仰付被下候様ニ奉願候，地代上納之儀ハ来辰年より午年迄三ヶ年之内沓ヶ年に金貳拾兩ツ、，末年より永々沓ヶ年ニ金四拾兩ツ、兩町より急度上納可仕旨相願申候

一、右人数之内松屋町太郎兵衛，五兵衛，茂兵衛，六之助，万次郎，庄兵衛，太兵衛，甚五兵衛，本八丁堀耆丁目伝六，長十郎，此拾人別段ニ相願候は拾人之者御預り之植溜場所奥行殊之外短ク，家作取統之儀新道差置候ては借家，住居等難仕候ニ付右新道建続ヶ申度候，此道増坪地代之義は前書之金高割合を以，来辰年より午年迄三ヶ年之内金三兩貳分余ツ、相納，末年より永々金七兩余ツ、前書金高之外ニ拾人より相増上納可仕旨繪図を以相願申候，右火除之明地にて其後植溜ニ被仰付候場所ニ御座候，此所度々願人御座候ニ付，若外え町屋ニ被仰付候てハ所々町人共殊之外迷惑仕候ニ付候て相願出申候，唯今迄之通植溜にて被差置候方可然哉と奉存候得共，瓦葺蔵造町屋に罷成候得は，植溜も同前にて火除之除(ママ)ニ罷成間敷候，地代も相納候儀ニ御座候間，願之通町屋ニ可被仰付候哉，左候ハ、養生所附町屋敷ニ仕置申度候，依之奉伺候，則繪図相添差上申候以上

四月

伺之通可申付旨 被仰渡奉畏候  
卯四月廿二日

大岡越前守  
稲生下野守

右書付ニ繪図相添享保二十年卯四月十六日松平左近將監殿へ上ル

覚

佐久間町貳丁目  
家持町人 拾老人  
同町三丁目  
同断 拾三人  
同町四丁目残地  
同断 三人

右町人共相願候は享保五子年類焼已後為火除元地御用地ニ被召上河岸通り元地之内にて八間通り蔵地御残シ被下，其外は同所続キ京極加賀守，新庄駿河守上ヶ地之内にて代地被下置候，右元地河岸通り有来候住居蔵裏行短く不勝手ニ付買候者，借り請候者も無御座難儀仕候，隣町之蔵地之儀は裏行何も長く御座候処，右三町之蔵地裏行八間宛にて御座候間，此度代地町家表通りにて貳町目之方坪数貳百五拾五坪余，三丁目之方坪数三百四拾坪余，四町目之方坪数七拾三坪余，繪図面黄色之場所地面差上，右代地として差上候坪数程有来候河岸通り住居蔵後口之方にて，繪図薄墨の場所被下置有来候蔵地共ニ裏行拾間余，拾三間余之蔵地ニ被仰付可被下候，尤代地表通りにて差上候地面は直ニ拜借地ニ被仰付可被下候，左候ハ、沓ヶ年ニ左之通地代金上納仕候

金拾三兩三步

右之通相願申候，先達て此類被仰付候并御座候火除之障ニも不相成，其外何之障儀無御座候間，願之通可被仰付候哉，左候ハ、養生所附ニ致置可申候，依之奉伺候，則繪図沓枚差上ヶ申候以上

四月

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候  
卯四月廿五日

大岡越前守  
稲生下野守

右書付ニ繪図相添享保二十年卯四月廿四日松平左近將監殿へ上ル

小普請古屋甚助支配  
本道 藤本道泉

右道泉儀養生所五ヶ年相勤申候、平生殊之外出情相勤候者ニ御座候間、御番方被 仰付候様ニ仕度候、左候得は養生所相勤候者励ニも罷成候ニ付申上候以上

七月

大岡越前守  
稲生下野守

右書付享保二十年卯七月十七日本多伊与守殿え上ル

覚

坂本町壱丁目月行事  
長右衛門  
町人とも  
同式丁目月行事  
善兵衛  
町人とも

右之者共相願候ハ先年兩町え預ヶ置候町屋裏之方植溜有来候、十文字之往来三間道此度五間ニ仕只今迄之通ニ指置、拾五ヶ所之商床不残取払、別紙絵図面之通植溜四構之分住居蔵より建続ニ仕、家作之儀は塗家瓦葺ニ可仕候間、請負地町屋ニ被仰付被下候様ニ奉願候、地代之儀は来辰年より午年迄三ヶ年之内壱ヶ年金貳拾五兩ツ、未年より永々壱ヶ年ニ金五拾兩ツ、兩町より急度上納可仕旨相願申候、右拾四年以前寅年火除之明地被仰付、其以後十文字道ヲ付植溜ニ被 仰付候場所御座候、四方竹矢来、木戸四ヶ所、番人給金、道造、水吐等年々入用相懸り候ニ付、去ル亥年相願植溜之内え商床拾五ヶ所申付候得共、商床まはらにて風雨之節ハ当り強ク度々修復出来、其上不用心ニ付借り人追々外え引越助成無之迷惑ニ付、此度前書之通請負町屋ニ相願申候、当春此場所より南八丁堀壱丁目、松屋町明キ地植溜之場所瓦葺町屋ニ所之者相願候ニ付申上、伺之通相濟養生所附町屋ニ被 仰付候、右之並も有之同様之儀故、此度願出申候儀ニ御座候、塗屋瓦葺ニ罷成候得は、植溜も同前にて火除之障ニ相成間敷候、地代も相

納其外何之相障儀無御座候間願之通被 仰付、是又養生所附町屋敷ニ仕置申度奉候候、則絵図壱枚指上申候以上

十月

伺之通可申付旨被仰渡奉畏候  
卯十月十五日

此絵図面之通可申付旨被仰渡奉畏候  
卯十月十五日

大岡越前守  
稲生下野守

右書付享保二十年卯十月七日松平左近将監殿へ上ル

長右衛門、善兵衛と申名之、下ニ下ヶ札  
本八丁堀壱丁目  
家主町人九人  
松屋町  
家主町人拾三人

右兩町え先年御預之植溜地面ニ有来候十文字往来道并新道共只今迄之通差置、相残候植溜之分瓦葺土蔵造り町屋請負地ニ相願申候、地代金来辰年より午年迄三ヶ年之内兩町より壱ヶ年ニ貳拾三兩貳分余ツ、未年より永々壱ヶ年ニ四拾七兩余ツ、可致上納旨相願申候、右当四月伺之上願之通町屋被 仰付養生所御用屋敷ニ仕候

十月

小石川養生所附御医師去ル丑年吟味之上本道貳人、外科貳人、眼科壱人ニ被 仰付、前々薬種料本道壱人ニ付金五拾兩ツ、外科壱人ニ付金貳拾兩ツ、眼科も金貳拾兩被下候得共、是又吟味之上本道大概三拾五兩程有之候へ共相濟候ニ付、百俵ツ、御薬料被下、外科は貳拾兩ツ、被下候得共、古疾病人多膏薬遣方相増、其上入湯薬も遣候間、薬料不足ニ相見候ニ付、金貳拾五兩程之積にて御薬料六拾俵ツ、被下候、目薬之儀別て高直成薬種にて、其上眼病人余程有之、薬種料不足ニ相見え候ニ付、外科同前ニ六拾俵ツ、被下候、然ル

処致困窮此度拝借之儀願出候得共、此段ハ取上不申候、然共吟味仕、左ニ申上候

小石川養生所附

当十二月より老人勤 本道 曲直瀬寿徳院

同断 当十月より老人勤 外科 小崎快庵  
右兩人書面之通老人ツ、にて毎日罷出骨折申候間、為御褒美銀拾枚ツ、被下置候様奉願候

同養生所附 眼科 伊達本覚  
右老人にて情出シ相勤候間、為御褒美銀七枚被下置候様奉願候

十二月

伺之通御褒美銀被下候旨 被仰渡奉畏候

卯十二月十九日 大岡越前守  
稲生下野守

大岡越前守  
稲生下野守

右享保二十年卯十二月廿二日本多中務大輔殿  
上ル

小普請組朽木修理支配 曾谷伯安  
小石川養生所え相詰病人可致療治候勤方ハ、前々之格承合其通相心得、小崎快元可被談候、尤町奉行可被相談候、右之通申渡候間、可被得其意候

右書付享保二十年卯十二月十六日本多中務大輔殿  
被成御渡候

木下道圓

小石川養生所え相詰病人可致療治候勤方は前々之格承合其通相心得、曲直瀬寿徳院可被談候、尤町奉行可相談候

右之通申渡候間可被得其意候

此書付享保二十年卯十二月晦日稲生下野守方え差越候

小石川養生所附御医師五人え御褒美奉願候儀申上候書付

小石川養生所附御医師去ル丑年吟味之上本道式人、外科式人、眼科老人ニ被 仰付候、前々葉種

料本道老人ニ付金五拾兩ツ、外科老人ニ付金式拾兩ツ、眼科も金式拾兩被下候へ共是又吟味之上、本道大概三拾五兩程有之候へ共相済候ニ付、百俵ツ、御薬料被下、外科ハ式拾兩ツ、被下候へ共、古疾病人多ク膏葉遣ひ方相増、其上入湯薬も遣候間、薬料不足ニ相見え候ニ付、金式拾五兩程之積薬料六拾俵宛被下候、眼科老人にて相勤金式拾兩被下候得共、目薬之儀別て高直成薬種にて、其上眼病人余程有之薬料不足ニ相見候ニ付、外科同前ニ六拾俵被下候、然ル処致困窮増御役料願出候得共、此段取上不申候、然共前々本道四人、外科四人、眼科は老人にて相勤候得共、人数致減少取統兼可申候間

小石川養生所附 本道 曲直瀬寿徳院  
木下道圓

為御褒美銀拾枚ツ、被下置候様奉願候

同所 外科 小崎快元  
曾谷伯安

為御褒美銀拾枚ツ、被下置候様奉願候

同所 眼科 伊達本覚

為御褒美銀七枚被下置候様奉願候

右養生所え与力共差出様子承候処何れも情出シ相勤骨折申候、為御褒美書面之通被下置候様奉願候  
右之通被下置候ハ、關所金を以相渡可申候以上

辰十二月

書面之御褒美伺之通可仕旨被仰渡奉畏候

辰十二月十二日

稲生下野守  
松波筑後守

右書付元文元年辰十二月十二日本多中務大輔殿  
上候処即日御下知相済候

養生所附殘金貸附之儀申上候書付

一、金千兩 養生所殘金

右は先達て貸附置候様ニ被仰渡候ニ付、家賃吟味仕候処、六七分迄之家賃は滞候儀無之丈夫ニ有之候、尅割位ニも貸附申候義有之候得共、万一滞之節中々元金程ニは難成候ニ付、六七分位之家賃ニ

て貸附除置候様可仕哉、奉伺候以上

辰十二月

伺之通貸附候様可仕旨奉畏候

辰十二月廿日

松波筑後守

右書付元文元年辰十二月廿日本多伊与守殿え上ル

町奉行え

内藤越前守組

廣井宗安

松平主計頭組

増山養甫

小石川養生所え相詰可致療治候勤方は前々之格承合其通相心得、町奉行可相談旨申渡候間、可被得其意候、但御役料六拾俵ツ、被下之

右御書付元文二年巳四月十一日西尾隠岐守殿被成御渡候

筋違外焼跡上ケ地之儀申上候書付

別紙絵図面之筋違御門外水野隼人正上ケ地之儀(筋字)は見沼新田開発、利根川新井通船願人川筋普請并御入用橋之分人足等自分入用を以仕立候ニ付、拝借地并町年寄樽屋藤左衛門買上地、其外養生所御入用附之町屋牛込肴町、袋町ハ御用地之代地ニ相渡、神田仲町養生所附之内ニは軽き御扶持人拝領町屋敷も入交御座候

一、柳原和泉橋より西ノ方佐久間町壱丁目之儀は、享保四亥年類焼以後御用地ニ上り、跡えしさり代地被下置候処、河岸通ニ蔵地無御座候ては商売物代地迄程隔迷惑仕候間、河岸通ニて奥行拾間之蔵地御免可被下候、此坪数は代地之内ニて差上、和泉橋新規修復共ニ引請、永々自分入用を以仕立可申旨相願、享保十巳年願之通被仰付候、然ル処奥行拾間ニては迷惑仕候間、町裏之方三間半ツ、御延可被下候、左候ハ、右之分ハ年々地代金可差上旨相願、享保二十卯年願之通被 仰付候、当時蔵地奥行拾三間余ニ罷成、地代金拾兩宛年々上納仕候、右此度類焼仕候水野隼人正上

ケ地之儀は公儀之町屋又は拝借地、買上地ニ御坐候得は、代地被下候不及候へ共、前書之通利根川通船請負之者拝借地は前段之義牛込肴町、袋町ハ元地御用地ニ被 召上候代地、其外軽き御扶持人拝領町屋ニて代地被下置分懸ヶ紙ニ色分仕候、養生所附町屋之分も代地不被下置得は、養生所御入用相減シ申候、樽屋藤左衛門買上ケ地も壱ヶ年ニ四拾兩ツ、上納、是又養生所御入用ニ差加申候、佐久間町之儀は代地之内ニ指上河岸蔵地被下置候得共、其時分河岸通ニ竹木薪等指置申度候、万一出火之節ハ一切火移不申候様ニ可仕旨相願候ニ付、願之通被仰付候処、此度竹木薪等え火移り別て及大火不届ニ候間、代地被下置候ニ及間敷奉存候、則絵図面奉入御覧候以上

三月

松波筑後守

[下ヶ札]

此所養生所附御入用金壱ヶ年式百六拾兩程相納申上候、前々より養生所御入用ハ壱ヶ年ニ五六百兩余御入用御坐候処、米高直ニ罷成、当年杯ハ凡千兩程も御入用可有御座と奉存候、養生所付町屋之内去午年御用ニ付本所松井町、小石川御簞笥町ニて二ヶ所外え被下置、當時は養生所附不足仕候処本文之場所上り候ては猶以養生所御入用金不足ニ罷成候間、此場所は被差置、河岸ニ材木薪等不差置候様可被 仰付候哉ニ奉存候、養生所も段々破損仕、当年ハ御修復余罷有之、当時御入用積申付置候ニ付、旁以奉存候

[下ヶ札]

町年寄樽屋藤左衛門買上地は先年金四百兩之買上地ニ被 仰付候、七ヶ年上納仕候代地不被下候へ共、金子御返し可被下義と奉存候

右書付元文四年未三月十七日松平左近将監殿え上ル

町奉行え

小石川養生所附町医師

養生所之療治情出相勤候ニ付 小川隆好  
本草委候段相聞候ニ付 町医師 野呂玄丈  
針治宜敷仕候ニ付 町針医師 前川玄徳  
右明後朔日 御目見被 仰付候間、五時御城え可  
被差出候

九月廿八日

右は元文四年未九月廿八日松平左近将監殿、石河  
土佐守え御渡被成候由写来ル

杏浦印

## 注

- 1) 本稿に関する文責は、對馬秀子。
- 2) 当時のメンバーは、秋田アキ子、入江隆夫、酒井シヅ、高橋和夫、對馬秀子、細谷芳三、増渕和代、宮武泰子、若尾みきである。

## 参考文献

- 1) 小川明. 赤ひげと小石川養生所肝煎の歴史. 小川明 発行; 2010. p.532-592
- 2) 小石川養生所之圖 全. 東京都立中央図書館特別文庫室蔵
- 3) 東京市役所編纂. 東京市史稿救済篇第一. 東京市役所; 1921. p.345-422
- 4) 享保撰要類集 (87) 二十八ノ上. 養生所之部 [91]. 国立国会図書館近代デジタルコレクション. dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2572842?tocOpened=1
- 5) 享保撰要類集 (88) 二十八ノ下. 養生所之部 [95]. 国立国会図書館近代デジタルコレクション. dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2572843?tocOpened=1